



Richard Maude オーストラリア政府の外交アドバイザーなどを経て、2020年から現職。専門は豪州とアジアの2国間関係など。

リチャード・モード氏
アジア・サエティ・オーストラリア
政策担当エグゼクティブディレクター

東南アジア諸国連合（ASEAN）は存在意義や内部の結束など数々の試練に直面するなか、10月下旬に首脳会議と閣内会議をオンラインで開いた。一連の会議で最も重要なものは、米国のASEAN加盟国を呼び込む体制の東アジア版を議論した点だ。

ASEANは、経済共同体などとしてインド太平洋地域の中心的な地位を占めるなど、大きな成果をあげてきた。しかし2020年以降、新型コロナウイルスの感染拡大の社会的・経済的影響を受け、21年2月のシンガポール閣内会議に、ASEAN加盟国への対応も成功していない。米国のASEAN加盟国を呼び込む体制の東アジア版を議論した点だ。

米と東南ア、2国間外交を

必要は感じていないようだ。米中対立との関わりは、固有の価値が評価されているのだと東南アジアを認得するために最も重要な、個別の2国間の外交だ。米国の外交は軌道修正が必要になる。

バイデン政権によるASEAN各国へのクチン供給の拡大方針は評価に値する。だがオースティン国防長官とハリス副大統領はインド太平洋戦略にとって重要なシンガポールやドモナム、フィリピンは訪問したが、インドネシアを訪れていない。インドネシアは後述にされているのではないかと懸念している。

米国内の難しい課題と超大国としての世界的な懸念事項を考えると、バイデン政権はこれでも向かえるのではない、とはいえない。インドネシアはASEANの要であり、20カ国・地域（G20）のメンバーであり、世界第4位となる約2億7千万人の人口を擁する経済大国だ。

米国は、インドネシアの将来の繁栄と安定に大きな直接の利益を持つ。民主主義国として成功を収めているインドネシアは、東南アジアが中国に支配された場合、米国の最良の機配にもなる。米国のインドネシアでの注目入り点だ。

関連英文は Nikkei Asia に
（<https://asia.nikkei.com>）

ASEANは、多国間協力の枠組みで、ASEANが主導的な役割を担うことを意味する「中心性」という考え方を育んできた。対立の多い時代に一定の主体性を原動力として、ASEANも地学的な地理に直面している。

ASEANは、多国間協力の枠組みで、ASEANが主導的な役割を担うことを意味する「中心性」という考え方を育んできた。対立の多い時代に一定の主体性を原動力として、ASEANも地学的な地理に直面している。